

「質」によって、教授学の手だての意味は簡単に変わるからである。②に偏りすぎのものだと、こうやりましたという実践報告のようなものになりかねない。「質」の問題はおいても、この手の研究では教授学的知見が当たり前すぎる嫌いがある。

このような①と②の乖離に関して、各話題提供者は「接点」をいかに考えるかに腐心していたと整理できるだろう。中川氏は、「記述を詳しくする」ことによって、藤村氏は、「学習者の心的プロセスを追い、効果の所以を明確にする」方向によって、鹿毛氏は、「実践を通して研究する（ということは実践の「ツボ」を押さえる必要があるが…）姿勢を強調する」ことによって、樽木氏は、「実践を基にはしても理論化はなければならない」という哲学で、乖離を克服しようと主張していたのではないか。

話題提供を聞きながら、3つのことを考えた。①教授学的な知見（ある種の一般性）を研究に含めなければ教育心理学ではないだろう。このとき是非 content を視野に入れ、諸条件と教授の交互作用を考慮して欲しい。また学習指導の「質」がある程度保証されていないと教授学的な話ではできないことも意識しておいて欲しい。②実践上でのある種の常識的な因果関係は前提にして欲しいし、やたらと統制群などを要求しないで欲しい。③教育心理学は、学習、学習指導の「質」を取り扱えるように成長すべきである。

指定討論者

森 敏昭

よりよき実践研究とは何か。この問いに答えるために、48巻3号～50巻第2号までに掲載されている18編の実践研究論文と、比較のために同巻同号に掲載されている一般原著論文の中から18編を無作為に選び、参考までに「教育実践への示唆」および「研究手法の洗練度」という2つの規準によって観点別評価を試みた。その結果、次のような事実が明らかになった（ただし、評定者は筆者1人なので、評定結果の妥当性・信頼性は保証の限りではない）。

(1) 「教育実践への示唆」の観点に関しては、実践論文の

方が一般論文よりも総じて評点が高い。

(2) これに対し「研究手法の洗練度」の観点に関しては、実践論文の方が一般論文よりも総じて評点が高い。

(3) ただし、実践論文・一般論文のいずれにおいても、それほど数は多くないが、「教育実践への示唆」と「研究手法の洗練度」の両方の観点での評点が高い論文や、逆に両方の観点の評価がそれほど高くない論文が散見される。

以上の結果から、「よりよき実践研究とは何か？」という問いに対して、次のような答えを導き出すことができるだろう。

第1に、教育実践の現場でデータを収集することは、それだけでは「教育実践への示唆」に富む論文の必要十分条件にはならないことに留意すべきである。つまり、よりよき実践研究を目指すためには、自分の研究テーマが今日の教育問題のどの点とどのように関わっているのかを慎重に検討することが大切である。

第2に、よりよき実践研究を行うためには、実践研究ならではの新たな研究手法を開発する必要があるのではないだろうか。従来の教育心理学では伝統的に量的データを重視し質的データを軽んじる傾向があった。しかし今後は、量的データと質的データのどちらか一方を偏重するのではなく、両者の長所を生かしつつ併用することが重要になるであろう。

おわりに

本シンポジウムでは、話題提供者5名、指定討論者3名という、多くの先生から、それぞれの役割に応じたご意見を伺い、またその先生間の討論もしていただいた。フロアからも、熱のこもったご意見をいただいた。全体として、議論は深まり、部分的ではあるが、いくつかの問題点が明確になった。しかし同時に、依然として、実践研究のイメージについては、いろいろと研究者により違いがあることも、明らかになった。今後は、このような議論を続け、共通理解の拡大を心から願う次第である。